

2012年8月23日／浪宏友ビジネス縁起観塾

仏性の自覚

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「五百弟子受記品」

1. 五百弟子受記品の概要

- (1) 富樓那が授記される。
- (2) 橋陳如をはじめとする五百人の阿羅漢が授記される。
- (3) 法会にいない人々も授記される
- (4) 五百人の阿羅漢を代表して橋陳如が、衣裏繫珠の譬えを話す。この話を通して、仏性を自覚できた喜びを表現しつつ、自分たちの至らなさを懺悔する。

2. 仏性を自覚できない私たち

(1) 思い込み

- ① 私たちは「衣食に追われてあくせく働き、欲望を追って右往左往しているこの身、この心が自分なのだ」と、すっかり思い込んでいます。
- ② 自分は、自分だけで生きている、自分ひとりで生きていると思い込んでいます。

(2) 自分本位の快さを求める

- ① 私たちは「この身、この心」が快く感じることを求めて生きている。
基本的にはこれでいいのですが、ここに自分本位が結びつくと、自・他・世間を傷つける行為につながる場合があります。
- ② 自分を取り巻く物的環境も人的環境も、自分の身と心の快さに貢献すべきものと考え、自分の快さに貢献するものは良いもの、自分を不快にするものは悪いものと考えようになります。
- ③ 自分を取り巻く物的環境も人的環境も、自分の身と心の快さを生み出すための道具と考え、自分の思うようにしようします。

(3) 真の自分に気づかない

- ① 自分の本質は仏性であるのに、なかなか気づくことができません。
- ② 自分は仏の境地に向かって向上していくのが、自分の本性に合った生き方であることに、気づくことができません。
- ③ 私たちは、自・他・世間の生かされ合い生かし合いの中で生きていることに、なかなか気づくことができません。

3. 阿羅漢への授記

(1) 阿羅漢

釈迦牟尼世尊は、500人の阿羅漢に授記したとあります。

阿羅漢とは、あらゆる迷いを除き去って、身のふるまい、言葉の振る舞い、心の振る舞いがすべて真理にかなっている人であり、世間の人々から尊敬される価値のある人々です。

(2) 釈迦牟尼世尊の思い

阿羅漢は、あらゆる迷いを除き去ったことで満足していました。しかし、釈迦牟尼世尊は、阿羅漢を仏の境地に導きたかったのです。

(3) 授記

500人の阿羅漢たちが、仏性の自覚を得たので、釈迦牟尼世尊は、授記をしました。

ここから、阿羅漢たちは、菩薩となって、仏の境地に向かって修行をすることとなりました。

4. 法会にいない人々への授記

釈迦牟尼世尊は、「ここにいない人々にも、このことを伝えなさい」とおっしゃいました。

「ここにいない人々」とは、次の人々とされています。

- ・以前に釈迦牟尼世尊の教えを聞きながら、最後まで聞かずに去っていった人々。

仏の教えを聞いた人々は、途中で挫折したとしても、やがて聞いた教えが心に芽生えて、また教えに戻ってくると考えられます。

- ・釈迦牟尼世尊が入滅した後に弟子になる人々

釈迦牟尼世尊から直接教えを受けなくても、釈迦牟尼世尊の説いた教えを実践していけば、必ず仏の境地にいたるといことです。

5. 普明如来

(1) 普明如来

五百人の阿羅漢たちは、みんな「普明如来」という仏さまになります。

「普明如来」とは、「世の中をあまねく光明化する如来」という意味です。

(2) 転次して授記せん

「転次する」とは「リレーする」というような意味です。

「転次して授記する」とは、「甲が乙に授記し、乙が丙に授記し、……」というように、授記のリレーが行われることです。

仏の教えを学んでいる私たちは、だれか先輩に授記されます。私たちはまた後輩に授記します。このように授記のリレーが行われることによって、仏の教えが長く、広く、伝わっていくのです。

6. 衣裏繫珠の譬え

(1) 親友のはからい

ある貧乏な人が、親友をたよってやってきました。親友は酒さかなをだして手厚くもてなしてくれましたので、その人はすっかり酔っぱらい、いつのまにか眠ってしまいました。

ところが、その親友は、急に公用で出かけなければならなくなりました。寝ている友だちを起こすのも気の毒だともい、その人のために、はかりしれないほどの値うちのある宝石を着物の裏に縫いつけておいて出かけたのです。

(2) 貧乏暮らし

目がさめたその人は、親友が長い出張に出かけたと知り、しかたなく立ち去りましたが、あいかわらずの貧乏ぐらしで、ついに放浪の生活にはいりました。そして、衣食のためにたいへんな苦勞をし、ほんのすこしでも収入があれば、それで満足するという状態でした。

(3) 親友との出会い

ずいぶんたってから、その人は、むかしの親友とバッタリ出会いました。親友はあいもかわらぬそのあわれなすがたを見て、「なんと愚かなことだ。わたしは君が安楽に暮らせるようにとおもって、着物の裏に高価な宝石を縫いつけておいたのに」といいます。

そして、あっけにとられている友だちの垢じみた衿の裏からその宝石をとりだしてやり、「さあ、これを売って、なんでも必要なものを買いなさい。なに不足のない生活ができるよ」というのでした。

7. 橋陳如の懺悔

(1) 親友が宝石を着物の裏に縫いつけてくれた

仏さまは「だれにも一様に仏性（はかりしれぬ値うちのある宝石）がそなわっているのだから、修行して仏の悟りをひらくように……」と教えてくださいました。

(2) 酔っぱらって眠っていた

自分の心は眠りこけていて、その真意をつかむことができませんでした。

(3) 少しの収入で満足した

ただ煩悩を除くことができただけで、それを悟りだと思い込んでいました。

(4) もの足りなかった

心の底にはほんとうの仏の悟りを求める心があって、もの足りない感じはしていました。

(5) 仏性の自覚

釈迦牟尼世尊の導きによって、自分は菩薩であることを自覚できました。すなわち、自分の仏性を自覚することができたのです。

(6) これからの人生

これから菩薩としての修業を積み、世のため人のためにつくしていけば、ついには仏になれることがはっきりと分かりました。

8. 「仏性」の二つの意味

- ・可能性＝どのような人であっても努力次第で、いつかは必ず仏になることができます。
- ・本質＝すべての人の本質は仏の本性そのものです。

9. すでに救われている

(1) 仏の救い

仏は、あらゆる存在のいのちを生き生きと発現させ、すくすくと伸ばそうとはたらきます。

このはたらきを受けていることを救われていると考えれば、私たちは、初めから救われているのです。

これを仏性があるというのです。

(2) 救われていることを自覚する

すでに救われていることを自覚し、救われている通りに生きていけばそれでいいのです。

(3) いのちの発現

いのちを生き生きと発現しているとは、自・他・世間の生かされ合い生かし合い関係の中で、自・他・世間を生かすはたらきをしていることです。

自分を生かし、人を生かし、世間を生かすはたらきをしているすがたが、真に救われているすがたであるということが出来ます。

(4) いのちを伸ばすとは

自分を生かし、人を生かし、世間を生かすはたらきが、より大きくなるのが、いのちが伸びることです。

10. 自分の認識

(1) 自分で認識できない自分

① 自分の感覚・知覚で認識できる自分の身体は、身体全体のほんの一部にすぎません。

自分が認識できないところで、身体は、複雑で、膨大で、不可思議なはたらきをしています。

② 自分の認識している自分の心は、顕在意識と言われます。認識できない心は潜在意識と言われます。

顕在意識より潜在意識のほうがはるかに大きいと言われていています。自分の認識できる自分の心も、心全体のほんの一部にすぎないことが分かります。

③ 物的環境、自然環境、人間関係、社会的環境など、自分に関係のある環境は膨大で、複雑で、とても知り尽くすことはできません。

(2) 認識できる自分で生きていく

① 私たちは、自分が認識している心・身・環境を意識して、生きていくことができます。

② 私たちは、自分で認識できる範囲の自分を、意識的に整えることで、自分の生きかたを方向づけたり、自分を磨いたりすることができます。

11. 自分をみつめる

釈迦牟尼世尊は、私たちに、自分をしっかりと見つめて、自分の本当のありかたを認識することを薦めました。

(1) 五蘊

自分は、身体的要素（色蘊）と精神的要素（受蘊・想蘊・行蘊・識蘊）の寄り集まりによってできていることをしっかりと見つめる。

(2) 無常

自分は変化していくことをしっかりと見つめる。

(3) 無我

自分は三重の世界によって生かされて生きていることをしっかりと見つめる。

(4) 縁起の法

自分は原因・条件・結果・影響の原理のなかで生きていることをしっかりと見つめる。

(5) 仏性

自分の本質は仏性であることをしっかりと見つめる。

(6) 自分の存在価値

自分は三重の世界の中で、現実にも人さまのためになっている事実を見つめる。

【参考】「自分」に関する迷い

「自分」に関する代表的な迷いに「我見」「我痴」「我慢」「我貪」があります。

1. 我見

(1) 我見

私たちは自分の身体や心を意識して、「この身、この心が自分だ」などと思い込みます。これを我見と言います。

(2) 常・一・主・宰の我

代表的な我見に、常・一・主・宰の我と言われる迷いがあります。

常	自分は永遠に変わることなく存在するものであると思う迷い。
一	自分はただひとつの完結した存在であり、分割することもできず、付け加えることもできないと思う迷い。
主	自分は何ものにも従属せず、他の存在と関わりもなく、独立して存在していると思う迷い。
宰	自分は自分の思うままになるという迷い。

(3) 「常・一・主・宰の我」は、迷いの心が自分の心の中に作り上げた幻の自分です。

幻の自分を本当の自分だと思い込んでいますと、現実との間に矛盾や摩擦が生じますから、苦しみの連続になります。

2. 我痴

自分に関する無知を我痴と言います。

① 自分に対する誤った思い込みをします。

常・一・主・宰の我が本当の自分だと思い込む、など。

② 自分の本当の姿を知りません。

自分は多くの要素が寄り集まってできていること、原因・条件・結果・影響の原理の中で生きていること、自分は変化し続けていること、自分は三重の世界の中で生かされて生きていること、などを知らない。

3. 我慢

我見と我痴によっておごり高ぶる気持ちになったり、他の人々を見下げたり、ものごとを自分の思う通りにしようとわがままに振る舞ったりすることです。

4. 我貪

自分が認識している身の満足、心の満足を求めて、わがままに歪んだ欲望を振りまわすことです。我貪もまた、我見・我痴から生まれます。